524-774
1200501494182

種子島の動植物

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak

昭和二年十一月

種子島の動植物

鹿兒島縣教育調査會

帝國圖書館藏

植物

昭和三年一〇二
帝國圖書館

松本俊吉寄贈本

種子島の植物小序

今回本縣からの委囑によつて種子島の植物方面のことを記すことになつた。私が同島に行つたのは僅に大正四年の春秋二回に過ぎない、而も同島の一部分しか歩いてゐないので、到底完全なものは出來ないのである。本稿は即ち私の調査したのを基本とし、鹿屋農學校教諭日野富三郎氏の採集せられた標本によつて足らないのを補ひ、尙當校學生農學科第二部池田米男、那須操、田中勝徑三君の採集標本をも參考にして編んだのである。此の記錄によつて同島植物の梗概を傳へ、讀者各位の參考に資する所あらば本懷の至である。

本稿をなすに際し、河越教授から終始懇篤なる示教を賜つたことは私の感謝に堪へない所である。又貴重な標本の借覽を許された日野教諭並に熱心に勞を分たれた當教室細山田氏に對し併せて謝意を表する。

昭和二年十一月十二日

鹿兒島高等農林學校植物教室

内藤　喬

524-774

帝国図書館蔵

上篇

種子島植物概況

種子島は、地勢一般に低原の狀をしてゐるとはいへ丘陵至る所に起伏重疊してゐるので、地相自ら一樣でない、從つて其の植物狀況も地區によつて著しい差があるから便宜上之を數區に分つて述べたいと思ふ

一、海岸區

海岸砂濱に最も普通の草本は、

ハマヒルガホ　ハマエンドウ　ハマグルマ
イハダレサウ　ハマニガナ　ハマスゲ
ハマアザミ　ハマボツス　カモノハシ
ケカモノハシ　オニシバ　ヒメクグ
マルバアカザ　ハヒキビ　カハラヨモギ
ハマボウフウ　フヂナデシコ　ツルソバ
カタバミ　ヤブジラミ　ギヨウギシバ
メドハギ　ススキ　トキハススキ

等であつて、時には、

ハマオモト　グンバイヒルガホ　二
ヲカヒジキ　タイワンイボクサ　クサスギカヅラ

等の如き興味あるものを混じてゐる。

海岸荒磯附近には、

ハマホラシノブ　タマシダ　オニヤブソラツ
ホソバワダン　イソノギク　クマノギク
コゴメマンネングサ　イワタイゲキ

等の種類を見る。

海岸部に生育する木本類には、

アコウ　マルバニクケイ　ハマビハ
ハマモクコク　ハマヒサカキ　クロマツ
ウバメガシ　マサキ　トベラ
イヌビハ　モクタチバナ　テリハノイバラ
ハカマカヅラ　スヒカヅラ　クサトベラ

等がある。尚、泥地には時にメヒルギを見る。

一、耕　地　區

1、畑　地

畑地は、海岸近い低地、山側緩斜面、人家附近等に開けてゐる。畑地及其の附近の雑草には、

メヒジハ　ノゲシ　クハクサ
コミカンサウ　ヨモギ　ヲトコヨモギ
シマニシキサウ　ミヤコジマニシキサウ　トウダイグサ
アミガササウ　ハマスゲ　ギヤウギンバ
キンエノコロ　コブナグサ　カリマタガヤ
チドメグサ　キツネノマゴ　オニタビラコ
ハナイバナ　コケリンダウ　ルリハコベ
ハコベ　スズメノヒエ　ツルボ

等であるが、本島には新開墾の畑地も多いので、其所には今尚原野に於て見るやうな雑草が侵入發育してゐる。

例へば、

ススキ　ヲガルカヤ　ワラビ
シラヤマギク　ツリガネニンジン　ヌスビトハギ
ヤマハクカ　リンダウ　メドハギ
ヒヨドリバナ　ノブダウ　エビヅル

ナハシロイチゴ　マルバハキ　四　センニンサウ

等の如きである。

2、水　田

水田は、谷間低濕の地、小流附近等に僅に發達を見るだけであるが、其所には自ら好濕性の軟弱な草本が盛に生育してゐる。水田中にあるものには、

ヒルムシロ　サンカクキ　タマガヤツリ
ホタルキ　ホシクサ　コナギ
アゼムシロ　チヤウジタデ　ヒデリコ
タカサブロウ　スズメノタウガラシ　ヤノネグサ
ウナギツカミ　ミヅビヱ

等があり、畦畔に多いものは、

ヤマキ　アゼガヤツリ　ハヒキビ
ヒメクグ　クルマバナ　ミゾカウジュ
ギヤウギシバ　ハンゲシヤウ

等である。

三、原　野　區

種子島は殆ど原野であるといつてもよいまでに原野は著しく發達してゐて、丘陵の大部分を領してゐる。日光よく直射し、風當り常に強く、多くは乾燥地をなしてをり、すべてに旺盛なる雜草の發育を見る。

ススキ　ヲガルカヤ　メヒジハ
チガヤ　ワラビ　マルバハギ
メドハギ　カハラケツメイ　ヲトコヨモギ
アキノキリンサウ　カウゾリナ　ヒヨドリバナ
ヲトコヘシ　トダシバ　ネズミノヲ
アキノタムラサウ　ヤマハクカ　オトギリサウ

等は原野の主成分をなす草本であるが、この他尙左の如き多くの種類を混生してゐる。

ヤマアザミ　ヲミナヘシ　キジムシロ
シラヤマギク　ヌスビトハギ　ヤクシサウ
キツネノマゴ　ホシダ　コシダ
ゲンノシヨウコ　ツリガネニンジン　ワレモカウ
ヒメアブラススキ　キンエノコロ　ウツボグサ
リンダウ　ノヒメユリ　ヒメヒゴタイ
ホソバノヒメトラノヲ　ツハブキ　クサハギ

コブナグサ　ゴマクサ　ヤハズサウ
コマウセンゴク　タヌキマメ　ミヤコグサ
スズサイコ　ヒメハギ　ヒキオコシ
スミレ　ホラシノブ等

一般に高地で乾燥してゐる部分には、比較的種類が少く、殆どイネ科草本を以て占領せられてゐるので、マメ科其の他の植物は、乾燥を好む少數のものが混じてゐるに過ぎない。之に反して原野として稍低濕な部分、傾斜地、森林に接近してゐる部分等に於ては、著しく多くの種類を包含し、其の發育狀況もまた高地のものに比して甚だ良好である。

原野にはまた屢々灌木類の點在してゐるのを見る。

ヌルデ　イヌビハ　イヌザンセウ
タラノキ　アラカシ　ヤマヤナギ
クヌギ　カシハ　ヒサカキ
ニシキウツギ　カンコノキ　クサギ
アカメガシハ

等の如きである。また、原野には屢々草質乃至木質の蔓莖類が生育纏絡してゐる。例へば、

センニンサウ　ノブダウ　エビヅル
カラスウリ　アマチャヅル　ボタンヅル
ヘクソカヅラ　アヲツヅラフヂ　ハスノハカヅラ
スヒカヅラ　サネカヅラ　テリハノツルウメモドキ
ナハシロイチゴ　サルトリイバラ　テイカカヅラ

等である。

四、森林區

低原狀の島であるから、深山的大森林は勿論見ることは出來ない。然しながら年中溫度の比較的高いことと、降水量の多いこととは、相俟つて森林の構成を促進容易ならしめてゐることは疑ない事實であつて、谷間の低地或は傾斜地に於ては屢々樹木の夥しい集落を見る。

森林として最も發達してゐるのは、中種子村の中央部附近及び北種子村鬼澤山を中心とする附近一帶であつて、特に谿流を挾み南西面の緩傾斜地に於てよく繁茂し、老樹鬱蒼として晝尙暗く、羊齒類蘭類、其の他蔓莖類の發育極めて旺盛であつて、一見熱帶地の大きい恒雨林を觀るやうである。

森林を組成する主林木は、

アラカシ　ウラジロガシ　マテバシヒ
シヒノキ　タブノキ　ヤブニクケイ
ヒメユヅリハ　ツクシザクラ　アヲカゴノキ
シロダモ　イス　モガシ

イイギリ　カクレミノ
シマサルスベリ　フカノキ

等であつて、之に更に亞喬木乃至灌木類として、

ヤマビハ　アデク　コバンモチ
ヤマデキ　タイミンタチバナ　モクタチバナ
ハマクサギ　トベラ　モクレイシ
アヲバノキ　シシアクチ　トキハガキ
サカキ　ムラサキシキブ　ハドノキ
カンコノキ　マンリヤウ　ネズミモチ
サクラツツジ　ヤマツバキ　アリドホシ

等を混在してゐる。之等は殆ど悉く常綠濶葉樹であつて、落葉濶葉樹は極めて稀である。

次に森林内の下草を見れば次のやうである。

ヤマビハサウ　エビオ　ホシケイ
ガンゼキラン　ナギラン　テンナンセウ
モロコシサウ　コクラン　フタリシヅカ
ツハブキ　メマダイコン　ウマノミツバ
ササクサ　ナキリスゲ　オホバヌスビトハギ

フユイチゴ　ハダカホホヅキ　イヌタデ
オホバコ　カンアフヒ　シウブンサウ

森林内羊齒類の主なものには、

ヘゴ　オホタニワタリ　リウビンタイ
ハチジヤウシダ　キンマウキノデ　ナチシダ
ベニシダ　ハヒホラゴケ　ヒトツバ
スヂヒトツバ　ホウビシダ　クルマシダ
イシカグマ　イハヒトデ　オホイハヒトデ
オホキジノヲ　コモチシダ　ホソバカナワラビ

等であつて、特に木狀羊齒ヘゴが谿間によく發達してゐるのを見るのは極めて興深い。

更に森林内の樹木には樹上に多くの着生植物が發達してゐるのを見る。その主なものには、

オホタニワタリ　マメヅタ　ナゴラン
フウラン　ボウラン　ミヤマムギラン
カヤラン　マツバラン　シシラン
シマシシラン　ウチハゴケ

等がある。

次に森林内の蔓莖類を見るに、之も亦甚だよく發達してゐる。例へば、

イタビカヅラ　フウトウカヅラ　サツマサンキライ
クワクワツガユ　トキハカモメヅル　ハスノハカヅラ
サルトリイバラ　カギカヅラ　ウドカヅラ
サクララン　オホツヅラフヂ　ナツフヂ
ツルアヲキ　ツルグミ　クズ

等の如きである。

森林樹木としては尙、クロマツを擧げねばならぬ。之は他の濶葉樹と混交して森林を構成することは殆どなくて、多くは高地丘陵部の峯通、或は林際等に疎立し其の數量も多いとは云はれない。

スギは所々森林をなしてゐる所があるが、之は人工造林によるものらしく、一般に發育は良好である。

五、沼澤及水流區

狹長な島であるから、河流と稱すべきものは殆どないけれども、小流は至る所に見ることが出來る。

アゼガヤツリ　ヒデリコ　オホテンツキ
ヤノネグサ　アギナシ　ホタルキ
チヤウジタデ　ハヒキビ　タマガヤツリ
ワアンペラ　ヤナギタデ　ウナギツカミ
ミゾソバ　シチトウ

等が附近に群落をなし、更に岸べには、

ツルソバ　ドクダミ　ホシダ
イタチガヤ　ヤマアザミ　ツハブキ
コモチシダ　スヒカヅラ　ツルシノブ

等があり、灌木類にも、

ヒサカキ　エゴノキ　カウライヤナギ
アキグミ　マサキ　モクレイシ
マルバウツギ

等は普通に見るものである。

沼澤としても本島には極めて乏しく、僅に寶滿池附近を擧ぐるに止まる。其處には、

ヒシ　オニバス
タヌキモ　イトモ　ホツスモ
ミヅユキノシタ

等の如き、分布上甚だ珍とすべきものがあり、尙、

等があり、また、

セイコノアシ

の群落を見る。

六、分布上注意すべき種子島植物

本島は其の位置が南方に偏してゐるだけ、著しく南方の植物分子に富んでゐることは云ふまでもない、左に其の主要なものを列擧する。

一、最も注意すべきもの

◎印種子島特産乃至分布極めて狹きもの。
○印種子島を以て分布の北限とすると思はるゝもの。

◎アマミゴエフマツ
○オキナハハヒネズ
○キリエノキ
○ウラジロエノキ
○ガヅマル
◎タネガシマセンニンサウ
○ヤンバルセンニンサウ
◎ツクシザクラ
○リウキウイチゴ
○ミヤコジマニシキサウ
○オホハマボウ
○シマサルスベリ
○シシアクチ
○アヲバノキ
○ウラジロフヂウツギ
○リウキウアケボノサウ
○イボタクサギ
○ヤマビハサウ
○ツルアヲキ
○シロミミズ
○リウキウアヲキ
○クサトベラ
○オホシンジユガヤ

二、稍々注意すべきもの。

リウビンタイ　ツルホラゴケ　ハヒホラゴケ
ヘゴ　オホタニワタリ　ヒメウラジロ
ナチシダ　シマシシラン　ソテツ

タヌキアヤメ　ナギ　一四、カウライシバ
ワアンペラ　シチトウ　カンツハブキ
クハズイモ　タイワンイボクサ　シカウラン
ナゴラン　アコウ　カウシウウヤク
マルバニクケイ　ハカマカヅラ　タチバナ
ツゲモチ　キンゴジクワ　シマウリノキ
サクラツツジ　シタキサウ　ツルマウリンクワ
グンバイヒルガホ　ハマヂンチヤウ　メヒルギ
ヤマヒヨドリ　ブクリヤウザイ

三、特に分布上興味あるもの。

クヌギ　カシハ　オニバス
ヒシ　ヤツコサウ　ワレモカウ
ミヤコグサ　ルリハコベ　ウツボグサ
ホソバラン

七、種子島の名木

本島産のものであつて、老樹名木として有名なもの二三を摘記する、特に之等に對しては、本縣として適當な保護管理をなす必要があると思ふ。

○西町の榕樹（ばんやうしゅ）

西之表町字西町の民有地内にある。一本の老樹であつて根株は約四坪計を占め、高さ約二丈五尺に及ぶ。人家稠密の町内にあつて、古來靈樹として尊敬してゐるものである、幸にその位置は恰も北種子村の元標地であり又掲示場が位置してゐるので、民有地ではあつても公有木と見做され、從つて毀損する者もないのは喜ばしいことである。

○慈遠寺の黑松

西之表町字春日の官有地で現在村立の公園内に在る。一本の老松であつて、目通一丈二尺、高さ約三丈、地上一丈の所から二叉に分れてそれが更に多數に分枝し翠蓋四方に垂れ約百坪の地面を覆うてゐるのは、見るからに壯觀である。幸に公園内であるから保護管理にも便利である。

○袈裟掛の黑松

西之表町字川迎の共有地内にある。一本の老松であつて、目通八尺、高さ約三丈、枝條よく繁茂し樹下には小碑が建つてゐる。

○七尋五葉（ななひろこのは）

北種子村大字安城字中割の國有林内にあるので、古田から安城立山部落に通ずる路傍に位置し、古田を距る一里半、西之表町を距る四里半の所である。

胸高周圍三丈六尺、高さ八丈、枝下二丈五尺、枝の伸長最大なるもの八十尺に達す、亭々群樹を壓

し秀鉾天を摩するの趣は、正に驚嘆に値するもの、樹齢約八百年と稱せられ・實に種子島第一の大樹であり老樹である。

只惜しむべきは老齢なる爲か、樹幹空洞となり白蟻の侵入した形跡を認められることである。又位置が通路側であるため、無智な通行人により屢々損傷を負はされてゐるのを見る。之等は速に適當の保護を加へ、以て可及的天壽を全うせしめたいものと思ふ。

七尋五葉といふのは大きい五葉松の意味であつて植物學上の和名は「アマミゴエフマツ」である。學名はPinus amamiana となつてゐる。

この學名及和名から見ると、奄美大島に産するやうに思はれるけれども、大島にあるのは悉く「リウキウマツ」であつて「アマミゴエフマツ」は無いのである。それ故「アマミゴエフマツ」といふのは當つてゐないので、寧ろ「タネガシマゴエフマツ」といふ名を用ひたいものだと思ふ。

實に此の五葉松は種子島の特産であつて、昔は澤山生育して居り、建築材としては勿論又所謂「クリ舟」材として漁民等が用ひたものであるが、現今では非常に減少してゐる、之は甚だ遺憾なことであるから、將來は是非造林その他の方法によつて增殖せしめたいものと思ふ。

かう思つて見ると、右の老大樹が現在尙健全でゐてくれることは、學界のためにも産業のためにも非常に意味深いことであり有難いことであると思ふ。

○上里小蜜柑

南種子村大字茎永字上里の共有林内にある。もと一本の老木であつたのが、枝が地に垂れ伏した所から發根して著しく廣い面積に蔓延し（約一反歩位）恰も臥龍のやうな奇觀を呈してゐる。

之も惜しいことには既に老齢である故か、所々枝幹の枯死したものがあり、全体として生育頗る不良である。小蜜柑といふのは或は「タチバナ」（之は林内所々に自生がある）の老木であるまいかと思はれるが、まだ調査不充分で斷言出來ない。若しさうだとすれば一層大切なものである。速に適法を講じて勢力を挽回せしめねばならぬと思ふ。

○熱帶果樹橄欖

之は栽培品であるから茲には略する。（中篇栽培植物の部參照）

中篇

種子島の應用植物

一、栽培植物

種子島に最も適してゐる作物としては、

甘藷、蕎麥、陸稻、菜種、里芋

の五種を擧ぐべく、之に次で成績良好なのは、

小麥、落花生、大根、西瓜其他の瓜類、葱類、馬鈴薯、等

であるが、蔬菜類は殆ど何の種類でもよく出來るやうである。新開墾の畑では、落花生は單に殼のみ出來て肝要な中の種子は無く全く無益に終ることがあると聞いてゐたが、之は落花生の根に共生する細菌の乏しいに原因するので、漸次熟畑となるに從つて此の憂は取除かれる筈である。大根は生育甚だ良好で大きいのが出來るが、惜しいことには害虫の發生が多くて困つてゐる。

果樹には、梨、李、枇杷、蜜柑、文旦、桃、無花果等

があるが、多くは人家附近の空地に栽植してゐるもので、數量も品質も共に劣等なものである。

熱帶植物であり同時に果樹であるところの、

カンラン（橄欖）

が西之表町の羽生氏邸の庭にある。高さは左程ではないが相當の大木で、よく繁茂してをり、毎年美

果を結ぶのである。之は熱帶果樹栽培上非常に參考になることであり、又植物學上からも貴重な資料であるから注意して保護するやうにしたいものと思ふ。（世間では南歐原産のオリーブを橄欖と誤稱してゐるが、之は南支那原産の眞の橄欖である）

尙、熱帶果樹としては

バナナ

があるが、之は露地で辛じて結實成熟するので、品質も劣るし生産もまた多いとは云へない。

特用作物としては、前記の菜種の外に

甘蔗、茶樹、琉球藍

等がある、之等の栽培はまだ小面積であるとはいへ、相當の成績を擧げ、品質も亦佳良であることは本島の産業上特に注意すべきことゝ思ふ。就中茶樹栽培の如きは將來最も矚目せられるものである。

二、建築用植物

本島に於て、古くから建築に用ひられたものは、

タブノキ　シヒノキ　アマミゴエフマツ

の三者が主要なものであつたが、近年は盛に

クロマツ　スギ

を使用するやうになり、スギの造林も各地に行はれるやうになつたのは、喜ぶべきことである。其の他

モウソウチク（方名、モウソウダケ）　アラカシ（方名、コーカシ）
アカガシ　ウラジロガシ（方名、シラカシ）
カゴノキ（方名、トギノキ）　コバンモチ（方名、ヤマアコウ）
フカノキ（方名、イモギ）　イス（方名、ユス）
シマサルスベリ（方名、シラキ、サルスベリ、アカウナギ）　チシヤノキ（方名、チシヤノキ）
等も常に用ひられてゐる。また柱などとして、
サクラツ、ジ（方名、ヤマツ、ジ、ツツジ）　シユロ（方名、シユロ）
が用ひられることがある。
ススキ（方名、ススキ）

本島民家の屋根葺用として、ススキが非常に重要なものであることは言を要しない、勿論稻藁や、麥稈を以て葺いてゐる家もあるけれども、多くは皆ススキを用ひるのである。幸に原野が多く、至る所大面積のススキ群叢があるから、供給は無盡藏である。

また、往々、小屋とか門などの柱として、
ヘゴ（方名、ヘゴ）
を用ひてゐる家があるが、ヘゴは植物學上重要な參考資料であるのみならず、逐年減少するの傾向があるので、之は特に注意して保護を加へ、妄に伐採しないやうに計りたいと思ふ。

本島でも內地でも、盆栽用或は蘭類を植ゑる台として屢々ヘゴ材を使つてゐるのを見るが、かういふことも可成く行はないやうにしたいと思ふ。無智な里人等は伐採しても直にその切株から蘖芽するものだと考へてゐるかも知れないが、ヘゴは他の濶葉樹のやうではなく、一度伐つたら、もうそれ限り株は枯れてしまふのである。私は種々な意味に於て多くの人々が此のヘゴを愛護せられるやうに切望に堪へないのである。

三、薪炭用植物

薪材としては、殆どすべての樹木を利用してゐるのであるから、茲に一々列擧するのは略する。

炭材としては本島に於て最も利用してゐるのは、
アラカシ（方名、コーカシ）　アカガシ
マテバシヒ（方名、マテ）　クヌギ（方名、ドングリ）
等である。殊にクヌギを賞用してゐる。

將來人口の增加に伴ひ薪炭材の需要益々多きを加ふべく、之を伐採すると共に他方に於ては適當の保護增殖を計ることに留意せねばならぬ。

四、下駄用植物

森林內に自生する樹木で、特に下駄材として利用せられるものには
カラスザンセウ（方名、イゲシラキ）　ハマセンダン（方名、シマグロ）

タラノキ（方名、タラ）　フカノキ（方名、イモギ）
イイギリ（方名、チロノキ）　ウラジロエノキ（方名、フクギ）　キリエノキ

等がある。特に後二者は材質が桐に酷似した優良品であつて、將來可及的植栽增殖を計るべきものと思ふ。

五、器具用植物

諸種の器具を製するに利用せらるゝのを列擧すると次のやうである。

ホウライチク（方名、キンチク）

竹籠を製す。子供は竹鐵砲を造る。

マダケ（方名、カラタケ）　モウソウチク（方名、モウソダケ）

建築材として寛に用ふるのは普通であるが、諸種の竹細工物、竹箸等とし、地下莖の太いのは煙草入とする。

アコウ（方名、アコウ）

材を盆、花式等に造る。

ハママモクコク（方名、ヘワリ）

木槌を製する。

ヤマビハ（方名、スウノキ、ハシギ、ヤマビハ）

材が眞直だからスウノキぐいひ、昔からお正月などの祝箸を造つたのでハシギといふのであるが、近年は竹箸杉箸に壓せられて殆ど利用しない。

ヤマツバキ（方名、カタシ）

材は木槌其他の細工物に使ふ。

トキハガキ（方名シブガキ）

材は鎌の柄とする。

スヒカヅラ（方名、シイカヅラ）

蔓の大きいのを煙管挿の代用を造る。

チシヤノキ（方名、チシヤノキ）

材は床の間の前縁として賞用せられるが、また煙草盆、膳など指物用に供せられる。其他馬耙の枠としても用ひられてゐる。

ムラサキシキブ（方名、ゴメゴメ）

折敷、盆などの指物を製する時にこの材を木釘として使用する。又、幹の性質が眞直なので竹稈中に入て自在鈎を造る。

ハマクサギ（方名、ハーガラ）

馬の鞍の横木として、腹帶の紐を結び付ける。さうすると此の材の臭氣に恐れて、蠅が襲來しないといふ。

六、食用植物

本島自生の植物で、食用に供せられてゐるものを擧げると次のやうである。

リウビンタイ（方名、マナツ、マナツグサ）

南種子村の住民は、屢々その葉柄の基部を切つて食べる由である。

ワラビ（方名、ワラビ）

萠出た若い芽を採集して來て、一晝夜計り水浸して後種々の料種に使ふ。又採集したまゝ乾燥して保存し置き後日の用に供することもある。

ナチシダ（方名、ヤマワラビ）

非常に大形な羊齒である、林中の陰濕地に生ゑてゐるが、里人はその幼い時莖葉を採集して食用にする。

ソテツ（方名、ソテツ）

種子や莖を採つて飯の代用として食べる。中種子、南種子地方がよく食べる。凶年の時には何處でも食べる。

ツルボ（方名、スビラ）

地下にある球根は、人々掘取つて百合と混じて煮食する。

シヒノキ（方名、シヒ）

果實を拾つて生食し又は煮食する。

タチバナ（方名、コズ）

森林内に散見する。「コズ」とは「コウジ」の意かと思ふ。

密柑に似た小形の果實を結ぶ、子供等は喜んで食べるけれども酸味が烈しい。里人は此の果實を採つて來て果液を搾り、酢の代用として食膳の調味料とし、刺身などに注いで食べる。又果實の内容を取去つて、その中に味噌を塡充し、適宜に切つて食用にする。

ヤマノイモ（方名、ヤマノイモ）

昔から「カルカン」饅頭にする。又トロロ汁とし或は煮食する。

ハマアザミ（方名、アザミ）

根を掘取つて食用にすること丁度ゴバウのやうである。

イヌビハ（方名、インタブ）

ナハシロイチゴ（方名、タカイチゴ）

何れも其の果實を食べる。

エビヅル（方名、ガレブ）

甘味に富む果實を結ぶから子供等喜んで食べる。

アキグミ（方名、グミノキ）

ツクグミ（方名、トラグミ）

フユイチゴ（方名、トライチゴ）

ホウロクイチゴ（方名、カシハイチゴ、シヲヅイ）

ナハシログミ（方名、サガリグミ）

何れも其の果實は子供等の好食するものである。

クサギ（方名、クサギ）

新芽を採つて料理に使ふ。其の法は、新芽に鹽を混じて揉むと綠色の泡が澤山でる、この泡は非常に苦いので洗ひ去り、その芽を適宜に切つて吸物にする。煮食してもよく又、豆腐を入れ種油の少しを加へて煮ると其の味は最も佳いとのことである。

ヨモギ（方名、フツ）

毎年三月の節句には「フツダンゴ」と稱する團子を造つて祝ひ、五月の節句には粽（芽卷）を製する外に尙「フツ餅」を作つて祝ふことなど、全く內地と同じである。

ツハブキ（方名、ツハ）

春新しく出た葉柄を採つて、煠でて皮を剝ぎ、料理に使つてゐる。

次に、直接食用にするのではないが昔から習慣的に使ひ來つてゐるものを擧げることにする。

ダンチク（方名、ダンチク）

五月節句の時大きい葉を採つて米を包み角茅卷を製する。

マダケ（方名、カラタケ）

五月節句の時、此の筍の皮に、前以て一晝夜間灰汁に浸しておいた糯米を入れて包み、之を煠でて茅卷を製する。

サルトリイバラ（方名、クワクワラノコーロ）

サツマサンキライ（方言、ヤマクワクワラ）

五月節句の時、此の葉を採つて來て餅を包んで蒸し、「クワクワラ饅頭」と稱するカシハ餅を製する。

カシハ（方名、ナラ）

五月節句の時、葉を採つて來て餅を包んで蒸し、所謂「カシハ餅」を作る。

次に、飲用植物一二を附記しておきたい。

カハラケツメイ（方名、スズコ）

原野に普通にあるので、之を刈つて乾し、適宜に細挫して焙爐にかけ、以て茶の代用にする。之は風味が佳いばかりでなく、利尿便通の効がある。內地でも所々之を用ひてゐるのを見る。

ツクシザクラ（方名、サクラ）

森林中に混生してゐる。かなり老木が多い。此の花を茶の代用にするのである。之は單に花ばかりでなく、新芽でも、蕾でも用ひるので、其の法は、先づ之等を摘んで來てザット水洗し、それを乾して適當に水分を去つた後、鹽と適宜に混合して壺の中に漬けるのである。花の鹽漬である。さうしておけば何時でも取出してお茶にすることが出來る。即ち茶碗に花蕾二三點入れて白湯を注ぐと忽ち芳香馥郁たる茶となるのである。夏時の飲用には殊に適してゐる。此の法は何種の櫻でも同樣である。本島では尙、キクの花も鹽漬にして茶の代用にしてゐる。

七、製粉用植物

本島に自生のもので澱粉を製するに利用せられてゐるものは次のやうである。

ワラビ（方名、ワラビ）

根（地下莖）を掘取つて水洗し、更に二日間位水に浸しておいて後、細碎して之を布袋に入れて搾りその液を沈澱させ、上澄液を去り之を乾すのである。

クズ（方名、クズカヅラ、カンネカヅラ）

「カンネ」とは本島では澱粉のことである。農閑の際、林中に入つて其の根を掘取り持ち歸つて、槌で打碎き或は臼で搗いて、丁度ワラビと同樣な方法で澱粉を製するのである。

キカラスウリ及カラスウリ（方言、カラスノスイクワ）

根を掘取つて澱粉を製すること前同樣である。

九、染料及單仁料植物

本島に自生のもので利用せられてゐるのは次の數種である。

ハマモクコク（方名、ヘワリ）

樹皮を剝ぎ釜中に入れて蒸し、その浸出液を以て魚網を染めてゐる。大島で「テーチギ」と云つて大島紬の染料にしてゐるものの一種もやはり此の植物である。

カンコノキ（方名、ツヅリボウ）

枝幹を細挫して釜中で蒸し、その煎液で魚網を染めてゐる。

フシノキ（方名、フシノキ）

此の葉に所謂「フシ」が出來る。之を「ハグロブシ」と稱して染料にすること内地と同樣である。

クチナシ（方名、クチナシ）

果實を染料に供する

カギカヅラ（方名、ネコヅメ、キゴウ）

皮を剝ぎ取り煎汁を作つて魚網を染める。

トキハガキ（方名、シブガキ）

果實から澁を製する

一〇、樹液用植物

モチノキ（方名、ヤマモチ）

これから所謂トリモチを製することは内地でも行つてゐる通りである。

サネカヅラ（方名、ナメラカヅラ）

この莖を叩いて汁を搾るか、又は皮を削つて水に浸しておくと、一晝夜ばかりで油狀の粘液となる。婦女子は髮洗用として普通之を使つてゐる。又車輛の油にも屢々代用してゐる。

一一、纖維用植物

シチトウ
ワアンペラ

この兩者は水濕地に自生してゐるので、之は寧ろ栽培したらよいと思ふ、その勞費も極めて少くて而も好結果が得られるであらう。中之島、屋久島の如きでは、既にワアンペラを莫蓙原料として移出してゐる。

ゲッタウ(方名、サニン)

之は林野に自生してゐるので、里人は屢々採つて結束用としてゐるが、特別な用途としては之を以て養蠶用の蠶箔を製することである、勿論蠶箔の縁は竹であるが、その中に縱横に渡すのに即ち此の葉を裂いたのを使ふのである。經費もかからず而も輕くていい。

一二、椎茸及木耳用植物

椎茸栽培用の榾(ホダ)材として、本島に於て廣く使用せらるるものは、

アラカシ　(方名、コーカシ)
シヒノキ　(方名、シヒ)
コバンモチ(方名、ヤマアコウ)
マテバシヒ　(方名、マテ)
モガシ　(方名、モガシ)

木耳(キクラゲ)の榾材としては、

エノキ　(方名、エノキ)
ゴンズイ　(方名、カラスマメ)
ヤマデキ　(方名、ハブタイ)
サンゴジュ　(方名、ハブタキ)

等であるが、生産量の多いのはサンゴジュであり、品質のよいのはゴンズイに生じた木耳であると云ふ。

一三、蜜源植物

本島には蜜蜂の蜜源となる多くの植物があるが、主なのを列擧すれば

シヒノキ　マテバシヒ　アカメガシハ
クヌギ　(方名、ドングリ)　モチノキ　(方名、ヤマモチ)
スヒカヅラ(方名、シイカヅラ)　チシヤノキ　(方名、チシヤノキ)
クサギ　(方名、クサギ)　サンゴジュ　(方名、ハブタギ)
ネズミモチ(方名、ネリモチ)　サクラツツジ(方名、ヤマツツジ)
タイミンタチバナ(方名、ヒツノキ)

などである、本島に於ける蜜蜂飼養は有望であらうと思ふ。之等樹木の外尙草花等も、殆ど四季を通じて豐富にあるのであるから、蜜源に心配はない譯である。只暴風に對して顧慮すればいい。

一四、雜用植物

本島に自生する種々の植物に就て、一藝一能あるものを列擧する。

イシカグマ（方名、コージネバ）

麹を製造する時、この葉を以て上から麹を蔽ふと、決して蟲がつかず結果がいいとのことで、殊に夏時用ひられる。蓋し葉面から水分を蒸發するから麹に適當の濕氣を與へることにもなつて、良結果の因ともなるのであらう。

ウラジロ（方名、スダ、モロバ、ショウグワツスダ）

正月神前に用ふること內地と同樣である。

ケカモノハシ（方名、カヤカブタ）

根を根櫛（タワシのこと）の原料として掘取らる。

マルバドコロ
キクバドコロ（方名、トコロ）

家屋の新築落成祝の際、根を掘つて之を神前に供へる習慣がある。然し食用にはしない。

ユヅリハ（方名、ユヅリハ）

正月神前に用ふることウラジロと同じ。

ヒサカキ（方名、ヤマケダ）

サカキ（方名、オホバユス、サカキ）

共に佛前に供へる。

コセウノキ（方名、ヒノヲノキ）

皮を剝いで子供等は獨樂を廻す時の鞭にする。

マンリヤウ（方名、ダマノキ、フツチリノキ）

果實をヒヨドリが好んで食ふ。子供等は果實を竹鐵砲の彈丸にする。

トキハカモメヅル（方名、ロクネンモドシ）

蔓が非常に强靱で、六年間も使つて尙役に立つけれどそんなに使つては濟まないので、初め採つて來た林に持つて行つて返上するといふのである。島民の至純な心情が思ひやられる。

ヲミナヘシ（方名、キーバナ）

花を佛前に供へる。

ホシダ（方名、マネーバ）

葉を拔いて、小葉も表皮も去つた中軸の先端に餌を結びつけて子供等は川蝦を釣る。

ソテツ　ボウラン　フウラン
ナゴラン　フヂ　ユヅリハ
サクラツツジ　マンリヤウ　サクララン

之等は盆栽とし或は庭園に植ゑて觀賞用に供してゐる。

以上に於て、本島の應用植物の大体は叙し終つたのであるが、之は不完全を免れない。尙精査すれ

ば更に之に附加すべき幾多の興味ある事實を見出すことと思ふ故、之が完成は一に後日を期したい。

下編

次の目錄は總て自生品であるが、便宜上自生化してゐるのも加へておいた。種子島產植物は未だ調査を完了してゐないのであるから全体だとは云はれない、然し之に依つて同島植物の大部分を知ることが出來ると思ふ。

植物目錄

羊齒植物（六二）

リウビンタイ科
リウビンタイ
コケシノブ科
ツルホラゴケ　ハヒホラゴケ　ウチハゴケ
ヘゴ科
ヘゴ
ノキシノブ科
ホウライシダ　カウザキシダ　オホタニワタリ

ホウビシダ　アヲガネシダ　三六
クルマシダ　ヒメウラジロ　コバノヒノキシダ
ヒトツバ　ヒカゲワラビ　スヂヒトツバ
シロヤマシダ　マメヅタ　ヘラシダ
ゲジゲジシダ　ベニシダ　ミゾシダ
キンマウ井ノデ　ホシダ　ヒメハシゴシダ
エダウチホングウシダ　イシカグマ　テツホシダ
ハマホラシノブ　ホラシノブ　タマシダ
オホキジノヲ　オホイハヒトデ　タチシノブ
ノキシノブ　イハヤナギシダ　イハヒトデ
カナワラビ　ホソバカナワラビ　ヤリノホクリハラン
イタチシダ　ワラビ　オニヤブソテツ
キノモトサウ　アマクサシダ　ハチヂヤウシダ
シマシシラン　シシラン　ナチシダ
ウラジロ科　ウラジロ　コモチシダ
コシダ
ツルシノブ科

ツルシノブ
ゼンマイ科　ゼンマイ
シロヤマゼンマイ
サンセウモ科
アカウキクサ
ヒカゲノカヅラ科　ナンカクラン
ミヅスギ
マツバラン科
マツバラン
イハヒバ科　クラマゴケ　タチクラマゴケ
カタヒバ

裸子植物（七）

ソテツ科
ソテツ
イチヰ科　イヌマキ　ナギ
イヌガヤ

マツ科

オキナハハヒネズ　アマミゴエフマツ　クロマツ

單子葉植物（一四七）

ヒルムシロ科

ヒルムシロ　イトモ

イバラモ科

イバラモ

オモダカ科

アギナシ　セトガヤ

イネ科

カモジグサ　スズメノテツポウ
ウシクサ　ヒメアブラススキ
コブナグサ　ヨガルカヤ
ダンチク　カンザンチク　トダシバ
ジユズダマ　カラスムギ　キツネガヤ
ムツオレグサ　ギヤウギシバ　カリマタガヤ
チガヤ　ケカモノハシ

カモノハシ　ササクサ　トキハススキ
ススキ　コチヂミザサ　チヂミザサ
オニシバ　カウライシバ　ミヅビエ
ハヒヌメリ　ササキビ　ハヒキビ
メヒジハ　スズメノヒエ　セイコノアシ
マダケ　ミゾイチゴツナギ　スズメノカタビラ
イタチガヤ　ヤダケ　タマザサ
オホエノコロ　キンエノコロ　ハマエノコロ
アブラススキ　ネズミノヲ

カヤツリグサ科

イトハナビテンツキ　アヲスゲ　ナキリスゲ
シラスゲ　タシロスゲ　ワアンペラ
ヒトモトススキ　クグガヤツリ　タマガヤツリ
ハハキガヤツリ　アゼガヤツリ　ウシガヤツリ
シチタウ　イガガヤツリ　ハマスゲ
クログワキ　シカクキ　テンツキ
ヒメテンツキ　クグテンツキ　オホテンツキ

ヒデリコ　ヤリテンツキ
シホカゼランツキ　ヒメクグ
イガクサ　ホタルキ
オホアブラススキ　サンカクキ

サトイモ科

セキシヤウ　クハズイモ
テンナンシヤウ　ウラシマサウ

ホシクサ科

ホシクサ

ツユクサ科

シマイボクサ　ツユクサ

ホテイサウ科

ホテイサウ　コナギ

タヌキアヤメ科

タヌキアヤメ

井科

カウガイゼキシヤウ　スズメノヒエ

ヤマキ
トラノハナヒゲ
フトキ
オホシンジユガヤ
ムサシアブミ

ユリ科

ソクシンラン　ノビル　クサスギカヅラ
ハラン　キキヤウラン　ノクワンザウ
ノヒメユリ　コオニユリ　カノコユリ
ジヤノヒゲ　オモト　ツルボ
サルトリイバラ　サツマサンキライ

ヒガンバナ科

ハマオモト　キンバイザサ　ヒガンバナ

ヤマノイモ科

ヤマノイモ　マルバドコロ　キクバドコロ
ヒメドコロ

アヤメ科

ヒアフギ　シヤガ

メウガ科

アヲノクマタケラン　ハナメウガ
メウガ　ゲツタウ（サニン）

ラン科

ナゴラン　シカフラン　エビネ　ムカゴトンボサウ　カキラン　シユスラン　コクラン　ホシケイ　ホソバラン

原生花被區（二四〇）

ハンゲシヤウ科
トクダミ　ハンゲシヤウ

フウトウガツラ科
フウトウカヅラ

センリヤウ科
フタリシヅカ

フウラン　マメヅタラン　トクサラン　ナギラン　タカツルラン　オキナハチドリ　チケイラン　ガンゼキラン

四二

シラン　ミヤマムギラン　リウキウエビネ　セキコク　ミヤマウヅラ　ムカゴサウ　ボウラン　カヤラン

ヤナギ科
ヤマヤナギ　カウライヤナギ

ヤマモモ科
ヤマモモ

ブナ科
アカガシ　アラカシ　ウラジロガシ　クヌギ　カシハ　マテバシヒ　コナラ　ウバメガシ　スダジヒ

ニレ科
ムクノキ　ウラジロエノキ　エノキ　キリエノキ

クバ科
クワクワツガユ　イタビカヅラ　アコウ　クハクサ　オホイタビ　カナムグラ　イヌビハ　ガジマル　ヤマグハ

イラクザ科

オニヤブマヲ　カラムシ

ヤナギイチゴ　ハドノキ

ヤマモガシ科

ヤマモガシ

ビヤクダン科

カナビキサウ

ヤドリギ科

オホバヤドリギ　ヒノキバヤドリギ

ウマノスズクサ科

カンアフヒ　四四

タデ科

オソバノウナギツカミ　イヌタデ

ヤナギタデ　ツルドクダミ

ウナギツカミ　ママコノシリヌグヒ

スイバ　ギシギシ

アカザ科

マルバアカザ　オカヒジキ

ナガバヤブマヲ

ツルソバ

ヤノネグサ

ミゾソバ

ヒユ科

キノコヅチ

ツルナ科

ツルナ

ナデシコ科

ノミノツヅリ　ミミナグサ

ツメクサ　ウシハコベ

ノミノフスマ

ヒツジグサ科

オニバス

ウマノアシガタ科

オキナグサ　シウメイギク

タネガシマセンニンサウ　ヤンバルセンニンサウ

ウマノアシガタ　キツネノボタン

ツヅラフヂ科

カウシウウヤク　アヲツヅラフヂ

ハスノハカヅラ

ヒメハマナデシコ　ボタンヅル

ハコベ　センニンサウ

ヒメウヅ

オホツヅラフヂ

モクレン科

サネカヅラ　シキミ

クスノキ科

バリバリノキ　カゴノキ　クスノキ

ヤブニクケイ　マルバニクケイ　アヲモジ

ハマビハ　アヲガシ　タブノキ

シロダモ

ナタネ科

ハマハタザホ　ナヅナ　タネツケバナ

イヌガラシ

ヤツコサウ科

ヤツコサウ

マウセンゴケ科

コマウセンゴケ

ベンケイサウ科

コモチマンネングサ　コゴメマンネングサ

ユキノシタ科

マルバウツキ　サハアヂサヰ　ユキノシタ

イハガラミ

トベラ科

トベラ

マンサク科

イス

バラ科

キンミヅヒキ　キジムシロ　ミツバツチグリ

ツクシザクラ　バクチノキ　シャリンバイ

テリハノイバラ　フユイチゴ　リウキウイチゴ

ホウロクイチゴ　カヂイチゴ　ナハシロイチゴ

ワレモカウ

マメ科

レンゲサウ　ハカマカヅラ　カハラケツメイ

オホバヌスビトハギ　ヌスビトハギ　リウキウヌスビトハギ

クサハギ　ノアヅキ　フヂ

ヤマハギ　キハギ　ミヤマハギ

ネコハギ　ハヒメドハギ　メドハギ
ミヤコグサ　シマエンジユ　コメツブウマゴヤシ
ヤハズサウ　ナツフヂ　クズ
タンキリマメ　スズメノエンドウ　ヤハズエンドウ
ツルナシヤハズエンドウ　カスマグサ

フウロサウ科
フウロサウ

カタバミ科
カタバミ

ミカン科
タチバナ　ハマセンダン　カラスザンセウ
イヌザンセウ　サンセウ　フユザンセウ

ヒメハギ科
ヒメハギ

トウダイグサ科
エノキグサ　ヒメユヅリハ　ユヅリハ
ハギクサウ　トウダイグサ　イハダイゲキ

シマニシキサウ　ミヤコジマニシキサウ　カンコノキ
アカメガシハ　コミカンサウ

ウルシ科
ヌルデ　ハゼノキ

モチノキ科
ツクシイヌツゲ　ツゲモチ　モチノキ
ナナメノキ　クロガネモチ

ニシキギ科
ツルウメモドキ　テリハノツルウメモドキ　マサキ
モクレイシ

ミツバウツギ科
ゴンズイ　ヤマデキ

カヘデ科
カヘデ

アヲカヅラ科
ヤマビハ

ブタウ科

ノブダウ　ウドカヅラ

ホルトノキ科

コバンモチ　モガシ

アフヒ科

フヨウ　オホハマボウ

オホバボンデンクワ

サルナシ科

ナシカヅラ　キンゴジクワ

ツバキ科

ヤマツバキ　サザンクワ

ヒサカキ　サカキ

オトギリサウ科

オトギリサウ　コオトギリ

コケオトギリ　キンシバイ

スミレ科

タチツボスミレ　スミレ

アカネスミレ　フモトスミレ

ハマヒサカキ

モクコク

ニホヒタチツボスミレ

ツボスミレ

イイギリ科

イイギリ　クスドイゲ

チンチヤウゲ科

コセウノキ　コガンピ

グミ科

ツルグミ　ナハシログミ

ミソハギ科

シマサルスベリ

ヒルギ科

メヒルギ

ウリノキ科

シマウリノキ

テンニンクワ科

アデク

ノボタン科

ヒメノボタン

アカバナ科

アキグミ

ミヅユキノシタ　チヤウジタデ　五二
ヒシ

アリノタフグサ科
アリノタフグサ　ホザキノフサモ

ウコギ科
タラノキ　ヤツデ　カクレミノ
キヅタ　フカノキ

セリ科
ツボクサ　ハマゼリ　ヒメチドメグサ
チドメグサ　ノチドメ　セリ
ハマバウフウ　ウマノミツバ　ヒメウマノミツバ
ヤブジラミ

ミヅキ科
クマノミヅキ

後生花被區（一六四）

シヤクナゲ科
サクラツツジ　シヤシヤンボ

ヤブカウジ科
マンリヤウ　シシアクチ　ヤブカウジ
モクタチバナ　ツルカウジ　イヅセンリヤウ
タイミンタチバナ

サクラサウ科
ルリハコベ　ハマボツス
モロコシサウ　コナスビ

カキ科
トキハガキ

バイノキ科
アヲバノキ　クロキ　ミミヅバイ

エゴノキ科
エゴノキ

ククセイ科
ネズミモチ　ナタオレノキ

マチン科

コフヂウツギ　ウラジロフヂウツギ

リンダウ科

リンダウ　コケリンダウ　フデリンダウ

ガガブタ　リウキウアケボノサウ？

ケフチクタウ科

サカキカヅラ　テイカカヅラ

タウワタ科

イヨカヅラ　トキハカモメヅル

キジヨラン　スズサイコ　サクララン

ツルマウリンクワ　シタキサウ

ヒルガホ科

ハマヒルガホ　アフヒゴケ　グンバイヒルガホ

ノアサガホ

ムラサキ科

ハナイバナ　チシヤノキ　タビラコ

クマツヅラ科

ムラサキシキブ　ヤブムラサキ　イボタクサギ

クサギ　イハダレサウ　ハマクサギ

ハクカ科

キランサウ　ウツボグサ　クルマバナ

タフバナ　ホトケノザ　ヒメキセワタ

ミゾカウジユ　イヌカウジユ　カキドホシ

エゴマ　ヤマハクカ　ヒキオコシ

アキノタムラサウ　ヒメナミキ　タツナミサウ

コバノタツナミ

ナス科

クコ　キンギンナスビ　ハダカホホヅキ

ゴマノハグサ科

ゴマクサ　スズメノタウガラシ　サギゴケ

コシホガマ　ウリクサ　イヌノフグリ

カハヂサ　ホソバヒメトラノヲ

ハマウツボ科

ナンバンギセル

イハタバコ科

ヤマビハサウ

タヌキモ科

タヌキモ

キツネノマゴ科

ヲギノツメ　キツネノマゴ

ハマヂンチヤウ科

ハマヂンチヤウ

オホバコ科

オホバコ

アカネ科

ヘツカニガキ　ギヨクシンクワ
シロミミヅ　ヤヘムグラ
クチナシ　リウキウアヲキ
ツルアヲキ　フタバムグラ
ヘクソカヅラ　カギカヅラ

スヒカヅラ科

ニシキウツギ　ハマニンダウ

五六

ニハトコ　サンゴジユ
コバノガマズミ　ハクサンボク

ヲミナヘシ科

ヲミナヘシ　ヲトコヘシ

ウリ科

アマチヤヅル　カラスウリ

キキヤウ科

ツリヾネニンジン　アゼムシロ

クサトベラ科

クサトベラ

キク科

ヌマダイコン　キクカフハグマ
ヲトコヨモギ　ヨモギ
イソギク　ヨメナ
コヤブタバコ　トキンサウ
ハマアザミ　ヤマアザミ

ガマズミ　キカラスウリ

カハラヨモギ
ヤマヂノギク
シラヤマギク
ノアザミ
オニタビラコ

ブクリヤウサイ　タカサブロウ　五八
アレチノギク　ヒヨドリバナ　ウスベニニガナ
ヤマヒヨドリ　ハハコグサ　サハヒヨドリ
ヂシバリ　ニガナ　キツネアザミ
アキノノゲシ　ホソバノアキノノゲシ　ヤクシサウ
ハマニガナ　ヒメヂシバリ　ホソバワダン
ヤブタビラコ　カンツハブキ　コオニタビラコ
シウブシサウ　カウゾリナ　ツハブキ
サハヲグルマ　ツクレメナモミ　ヒメヒゴタイ
ノゲシ　クマノギク　アキノキリンサウ
ヲナモミ　ハマノギク

動物

動物

第七高等學校造士館　動物教室

日野光次

動物の地理的分布からする時本州四國及九州等は凡て舊北地帶に屬し屋久島種子ケ島は該地帶に共通なる動物分布上の南限とせられ七島洋を距てゝ遠く南方の奄美大島琉球列島等のそれとは著しき分布上の色彩を異にするものなり　種子島は周圍僅かに三十七里餘の小島なるも地質は殆んど全部第三紀層を以て成りそこには動物に就ても亦種々特有のものあるは言を俟たず哺乳動物につき數例を示さん

ヤクシマヒメネズミ（種子島及屋久島に產す）セグロアカネズミ（種子島及屋久島に產す）ヤクシマヂネズミ（種子島特產）ヤクシマモグラ（種子島及屋久島に產す）コイタチ（仝上）の如し、而して馬毛鹿（マゲノシカ）（假稱）（馬毛島種子島及屋久島に產す）に就ては未だ充分なる研究なく從つて之が內地の鹿と同一種なるかは疑問に屬するものなるが該種が馬毛島のあの低丘に於て全沿岸の蘇鐵林中を安全平氣に橫行する自然の狀は當に種々なる方面に野生動物研究の好材料たるを失はず本種は種子島及屋久島に分布するは注目に値す更に所謂「牛馬」（ウシウマ）なるものあり之が來歷は遠く島津義弘公が韓土より奇獸を鹿兒島に持ち來りしが第二十代綱貴公の天和三年六月に種子島に移入されし後種々變遷を經て今日に及べるものなるが果して之が最初移入されしものと同種のものなるかは勿論斷言の出來ざるものである

本種は普通馬に比し躰軀倭小なるも至つて頑强であり更にその重なる特徴の二三を擧ぐれば被毛の發育は甚だ不善にして著しく縮縮し又甚しきは殆んど躰軀の大部と尾軸の全裸出の狀且つ蠶の著しからざる等よりして所謂「牛馬」(種子島で用ふ)の名稱生じたるやも不計尙性的發育は普通馬に比し遲く明に晩熟性を示すが如く牡に於ては睪丸下降の現象著しからず即ち睪丸は外部には殆んど顯はれざるもの多し而して姙襲期は普通馬に比し一ヶ月乃至二ヶ月も短しと云ふにあり之が果して學術上別種又は變種と見るべきかは後日の研究に俟つのみ　種子島は氣候四時温和であり近年は開墾に伴ひ家畜獸の牧養も日々盛んなるものあるが如し近海にはタツノオトシゴ。タコブネの如きやゝ南系種の産するあり其他は略す

動物

一、脊推動物

(一)　哺乳類

食蟲目

鼹鼠科

ヤクシマモグラ

鼩鼱科

ヤクシマヂネズミ

囓齒目

鼠科

鹿兒島高等農林學校　動物學教室

岡島銀次

セグロアカネズミ　ヒメネズミ
タネハツカネズミ　六四　ヤクシマヒメネズミ

翼手目
　雛蝙蝠科
　　アブラカウモリ
食肉目
　鼬鼠科
　　コイタチ　テン
偶蹄目
　鹿科
　　シカ
奇蹄目
　馬科
　　ウシウマ

（二）鳥類

鴉科
　ハシブトガラス　ハシボソガラス　コムクドリ
アトリ　スズメ　クロジ
　アヲジ　ホホジロ　ホホアカ
鶺鴒科
　タヒバリ　キセキレイ　ハクセキレイ
繡眼兒科
　メジロ　シマメジロ
四十雀科
　タネヤマガラ
菊戴科
　キクイタダキ
鶫科
　チゴモズ　モズ
鶲科
　ヒヨドリ　ヒヨドリ一種
鶺鴒科
　サメビタキ　キビタキ　ムギマキ
鶯科

ウグヒス　ヤブサメ　六六
鶺科　セツカ一種
トラツグミ　シロハラ
ツグミ　イソヒヨドリ　アカハラ
ルリビタキ　ジヤウビタキ　ノビタキ
タネコマドリ　アカヒゲ　ノゴマ
鶺鴒科
ヲカハミソサザイ
雨燕科
アマツツバメ
翡翠科
カハセミ一種
啄木鳥科
タネアヲゲラ
梟鴟科
トラフヅク
鷲鷹科

チヨウゲンボウ　コノリ　トビ
鴉科
ミサゴ
鷺科
コサギ　ゴヰサギ
雁鴨科
マガモ　カルガコ　コガモ
ヒドリカモ　ヲナガガモ　ヘシビロガモ
オシドリ　スズガモ
鸕鷀科
ウミウ一種
鳩鴿科
カラスバト　キジバト　アヲバト
リウキウアヲバト
鷸科
キヨウジヨウシギ　クサシギ　イソシギ
ヤマシギ　タシギ　タマシギ

鷗科
セグロカモメ
秧鷄科
ヒメクヒナ
鶴科
マナヅル
三斑鶉科
ミフウヅラ
雉科
ウヅラ　タネキジ
(三)爬蟲類
蛇目
游蛇科
ヤマカガシ　シマヘビ
蝮蛇科
マムシ
龜鼈目

蠑龜科
アカウミガメ
(四)兩棲類
無尾目
蟾蜍科
ヤクシマヒキガヘル
赤蛙科
ニホンアカガヘル　ヤマアカガヘル
兩蛙科
ニホンアマガヘル　ツチガヘル
(五)淡水魚類
硬骨魚目
蛙科
アユ
鮠科
ドゼウ
鯉科

フナ　コヒ

鰻科

オホウナギ

湯鯉科

ミキウ　ユゴヒ

鯊科

ゴクラクハゼ

二、節肢動物

(一) 昆蟲類

直翅目

蝗蟲科

ハネナガイナゴ　トノサマバツタ

ツチイナゴ　ミヤマフキバツタ

オンブバツタ　ヒメバツタ

イボバツタ

螽斯科

キリギリス　ヤブキリ

ツユムシ　ウマオヒムシ

蟋蟀科

ヒメコホロギ　エンマコホロギ

蜚蠊科

ハネナガゴキブリ　オホゴキブリ

サツマゴキブリ　チヤバネゴキブリ

疊翅目

蠷蝮科

クギヌキハサミムシ

蜻蛉目

蜻蛉科

ウスバキトンボ　ナツアカネ

シヲヤトンボ　シヤウジヤウトンボ

テフトンボ

蜻蜓科

ヲニヤンマ　オホシホカラトンボ

ハラビロトンボ

524
774

豆娘科
ハグロトンボ　キイトトンボ
弱體目
苔下蟲科
コケシタムシ
有吻目
白蟻蟲科
アヲバハゴロモ　ベッカフハゴロモ
蟬科
アブラゼミ　クマゼミ
イワサキゼミ　ニイニイゼミ
長椿象科
コマダラカメムシ　カンショノクロナガガイタ
緣椿象科
ホホヅキカメムシ　ホソヘリカメムシ
クモカメムシ　ハラビロカメムシ
椿象科

キツコウナガメ　クロカメムシ　キホシヒメマルカメムシ
コクロガイタ　アカスヂカメムシ　エビイロカメムシ
鱗翅目
萊蛾科
コナガ
螟蛾科
キボシオホメイガ　アカマダラメイガ　シロイチモジマダラメイガ
ツマグロシマメイガ　アトモンミヅメイガ　イネノハカジミヅメイガ
シロテンミヅメイガ　シロオビノメイガ　ヨスヂノメイガ
コブノメイガ　シロモンノメイガ　クロスヂノメイガ
モモノメイガ　キバラノメイガ　クロミスヂノメイガ
ネモンノメイガ　クロスヂキンノメイガ　ウコンノメイガ
ホソバノメイガ　キアヤヒメノメイガ　ヒトスヂクルマウスバ
木蠹蛾科
ゴマフボクトウ　ウスキホソバ
斑蛾科
ルリハダホソクロバ　ベニゴマダラヒトリ

524
774

燕蛾科
クロホシフタヲ　キスヂシロフタヲ
尺蛾科
ヒメツバメエダシヤク　ウラベニエダシヤク　マヘキヲエダシヤク
ウスヲエダシヤク　アカエダシヤク　キトガリヒメシヤク
サカハチヒメシヤク　シモフリシロヒメシヤク　ナガサキヒメシヤク
夜蛾科
ヒメモクメヨトウ　オホトモエ　シロスヂトモエ
ヲキナワアシブト　サンカククチバ　ナカグロクチバ
アカエグリバ　キンモンエグリバ　オホシラホシアツバ
タイワンキシタアツバ
毒蛾科
ゴマフリドクガ　ヅグロモンシロモドキ
天蛾科
リウキウオホスカシバ　ホシヒメホウジヤク　ヒメホウジヤク
ヒメクロホウジヤク　ホシホウジヤク　セスヂスズメ
イツボンセスヂスズメ

鳳蝶科
アゲハ　キアゲハ　カラスアゲハ
クロアゲハ　モンキアゲハ　ナガサキアゲハ
ジヤコウアゲハ　クロタイマイ
粉蝶科
モンシロテフ　スヂグロテフ　ツマキテフ
モンキテフ　キテフ　ツマグロキテフ
ツマベニテフ
蛇目蝶科
ヒメウラナミジヤノメ　キマダラヒカゲ　ヒメジヤノメ
コノマテフ　クロコノマテフ
天狗蝶科
テングテフ
蛺蝶科
スミナガシ　コミスヂ　ヒメアカタテハ
ムラサキタテハ　イシガケテフ　アヲタテハモドキ

524
774

タテハモドキ　オホウラギンヘウモン　ウラギンシジミ
ツマグロヘウモン　コムラサキ　ツバメシジミ
小灰蝶科　ムラサキツバメ　シモフリシジミ
ムラサキシジミ　アマミウラナミシジミ
ウラナミシジミ　ヤマトシジミ
ルリシジミ
挵蝶科　チヤバネセセリ　クロセセリ
キマダラセセリ
アヲバセセリ
脈翅目
長角蜻蛉科
ツノトンボ
蛟蜻蛉科
ホシウスバカゲロウ
双翅目
家蠅科　キンバイ
イヘバイ

食蚜蠅科　アカアブ　メクラアブ
オホハナアブ
長吻虻科
クロバネツリアブ
食蟲虻科
シホヤアブ
虻科
ウシアブ
水虻科
ミヅアブ
蚊科
ウスカ
微翅目
蚤科
ノミ
鞘翅目
瓢蟲科

524
774

ナナホシテントウ　テントウムシ

金花蟲科

クロウリバイ　ウリバイ

天牛科

キボシカミキリ　ナガゴマフカミキリ　クロトラカミキリ

象鼻蟲科

ヒメシロコブゾウムシ　シロコブゾウムシ

吉丁蟲科

オバタマムシ　クロタマムシ

金龜子科

カブトムシ　ドウガネブンブン　アヲドウガネ

ヒメコガネ　クロカナブン　シラホシハナムグリ

ハナムグリ　クロハナムグリ　コアヲハナムグリ

鍬形蟲科

ノコギリクハガタ　クハガタムシ

閻魔蟲科

コエンマムシ　ルリエンマムシ

龍蝨科

コガタノゲンゴロウ

斑蚤科

ハンメウ　コハンメウ　コニハハンメウ

ヒメハンメウ　ハマベハンメウ

膜翅目

蜜蜂科

マルクマバチ

細腰蜂科

クロアナバチ　ルリジガバチ　ヒメキゴシジガバチ

鼈甲蜂科

キヲビベツコウ

土蜂科

モンハラナガバチ

524
774

昭和二年十一月廿四日印刷
昭和二年十一月廿五日發行

鹿兒島縣教育調査會

鹿兒島市西千石町百拾九番地
印刷人　馬場種次

鹿兒島市西千石町百拾九番地
印刷所　文尙堂印刷所
電話一六四三番

524
774

NO.

"F-M"
PAMPHLET BINDERS
are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thickness
851(菊倍)	30.cm. x	24.cm. x	1cm.
852(四六倍)	26. ,, x	18.5 ,, x	1 ,,
853(菊)	22.5 ,, x	15. ,, x	1 ,,
854(四六)	18.5 ,, x	12.5 ,, x	1 ,,
855(特)	24. ,, x	15. ,, x	1 ,,

other sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES OF ALL KINDS
F. MAMIYA & CO.
OSAKA - TOKYO - FUKUOKA